

翻訳『ドイツの月光』

(原題 “Deutscher Mondschein”)

ヴィルヘルム・ラーベ作／永末和子訳

(平成19年10月19日受理)

Die Übersetzung der Erzählung “Deutscher Mondschein” von

Wilhelm Raabe

Übersetzer : Kazuko NAGASUE

Department of Foreign Languages, Kawasaki Medical School,

577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan

(Received on October 19, 2007)

はじめに

私はいまラーベの作品を訳そうというのだが、この作品が注意を引いたのは、二〇世紀を代表する作家として確たる地位を確保するカフカとの類似性にほかならない。ラーベの生没年は一八三一年と一九一〇年であり、一方、カフカのそれは一八八三年から一九二四年であって半世紀の隔たりがある。あまつさえカフカはブラハ生まれのユダヤ系ドイツ語作家である。ドイツとチェコと国境を異にする両者の共通

点は目下のところ、ドイツ語作家と言うことのみである。だがここで我々は踏みとどまり、そして静かにヨーロッパという文化圏を想像しなければならない。ヨーロッパ文化圏を遡源し、水脈をたどらねばならない。我々はヨーロッパ文化がギリシャ・ローマの神話を源にし、そこに生い育つ蔓に我が身を絡みつかせながら、芸術家と呼ばれる人種は幾世代も繰り返しく彼の時代の姿をこの水面に映し出しては汲みだし、我が像を結実させてきた。キリスト教文化が支配するとき、独裁者や圧政に打ちひしがれ、抑圧の重さに喘ぐとき、彼らは絶えずここへ回帰した。彼らは共通の記憶の奥底を基盤にしているのである。訳者のドイツ文学への関わりはラーベ研究から出発する。ところが諸事情から、今回はカフカからラーベを読むという逆のたどり方となった。作家は社会現象まで含めて事物から抽出された独立・普遍的な特質・クオリア (qualia) を実感し、その質感を手触りしイマジネーションの透過路を抜けながら、濾しだされたことばで詩作する。純粹言語となつて一つの世界がそこに横たい、読者がかかるものとして手にする。ならば、ラーベとカフカが通底する何ものかを我々の前に提示したからとて、なにも不思議はない。事実、両者の共通性を論じる研究論文も存在する。しかし、いまだ日本において紹介されること極少のラーベの作品そのものを提供して見る必要がある。牽強付会とすら説に出会うも出会わないも、まずは作品がなくてはなるまい。

当作品は一八七二年三月二四日から四月八日までの二週間書き上げられている。速い筆の走りである。一八七一年一月十八日はドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム一世が勝利の声も高らかに制圧したパリ市ヴェ

ルサイユ宮殿の「鏡の間」で戴冠式を挙行了した日である。この式典の

模様を描いた画家アントン・フォン・ヴェルナーの油彩画は誰しも知る一枚であるが、そこに描かれた光景は、式典はまるで軍隊のそれのように軍服、サーベル、軍旗に連隊旗、これらに埋め尽くされ、フロックコートの紳士はこの群に完全に埋没している。いわんや国民の代表者など一人として見当たらない。ヴィルヘルム一世とはプロイセン王のことであり、つまりは「小ドイツ」国が厳然として存在することとなった歴史的瞬間のいわば記念写真であると同時に、新しく誕生した帝国がどのような性質のものであるかを象徴するものでもある。ラーベはオーストリー・ハンガリー帝国を包含する「大ドイツ主義者」であったことは周知の事実である。この一事のゆえに、彼は作家活動の拠点としていたシュトゥットガルト（領主は小ドイツ主義）を去らざるを得ず（一八七〇年七月）、故郷ブラウンシュヴァイクへ向かう。日本における彼の政治性への言及はまことに少ない。本作品はその伏せられていた現実社会に対する社会批判性の高い作品である。この創作態度は人間の実存に問題を提起するものであることは言うまでもない。時代状況は彼の多くの作品に自己韜晦のヴェールを強要したが、この作品ではかなりストレートな形で実存への問いかけがなされている。カフカとの相違は物語技法の一つ枠小説仕立てによる韜晦にある。これにより職業作家としてのラーベは時代の読者と妥協した。しかし、作中の本来私で語るべき箇所があなたによって進められていることは、一つの見どころであることを指摘しておく。自己疎外の典型例をラーベはこうして提示しているのである。作品論はまたの機会に譲る

として、作品そのものの紹介に移る。

.....***.....

ドイツの月光

わたしたちは心穏やかに、興奮の一滴も盛ることなく物語ることにしよう。わたしはドイツに対して法外なほどに冷静な人間であり、五感を集中させることも心得ている。その上、わたしは法律家であり、私の家内にとつては夫であり、息子たちにとつては父親である。リラの花の四季でも、また立ち葵や向日葵やアスターの咲く四季でもないというのに、センチメンタルもしくはロマンチックな気まぐれに露さている感じに襲われる。それが私の常態である。わたしは日記をつけていないが、記入式のカレンダーを毎年書き溜めすべてを年ごとに纏めて書庫の一隅に整理している。まずこうお話しして、私は、一八六七年のことと確信をもって、話を始めることにしよう。私はその年、海が送り出す潮風と打ち寄せる海水の効用を勧める医師の意見に従って転地療養の目的でジュルト島にいた。そしてその地で、ある出会いをした――まったく途方もない知己を得ることになったのだ。

当然のことながら、こんな場合、私は、時々心を動かされたことを、それどころか頻繁に起きることだが、執筆したものや手紙、あるいは既に印刷し普及しているものにさえ、あらためて私自身の経験や感情を文字に託して再現する、あるいは更に訂正を加える、または力を蘇らせてみるという気持ちを抑えることができなくなってしまう。海に

は打ち寄せる大波、陸には生い茂る砂丘カラスムギに砂地ライ麦、空には鷗の飛行、そして何よりも西から吹く風があった。それらは束になって、あのドイツの官吏の存在という代物の汗と埃を落し切つてしまふ必要に迫られた者たちに、心平らかな、リフレツシユする印象を植え付けたのだつた。もちろんいまお話ししたりフレツシユに先行するストレスの複合体は格別で生易しいものではなかつたので、こうした一切が私としてその例外ではなかつたので、大層効験あらたかであつたことは云うまでもない。

わたしはティンヌム村とヴェスター村の丁度境界近くに逗留してゐた。そういうわけで浜辺やありがたい聖なる海水浴に与るには、少なくとも小半時は要さねばならなかつた。更に近いとはいへないものの少々行けば、毎正午、相当額のみかえりに、我々を内側から完璧元氣にして再び立ち上らせてくれるかの氣高き御仁のもとへ行けた。慎ましやかに馴致されたドイツの国家官吏の私は、なにも建物の快適さや、あるいは一分の隙もない豪華の極みなどを求めようなんて氣は毛頭ない。わたしは私の二一本あるパイプの中から七本を持参していたので、むしろどこかの古墳のなかでも、ひとりきり快適に納まりきつておれば、それでもう十分であつた。

閑話休題。―わたしはあるバン屋に宿を取つていた。この御仁のほうは浜辺のオークションで手に入れた木片をパン竈にくべてはパンを焼く職人だつた。つまりは浜辺に打ち上げられる座礁した船の梁や垂木、桁が燃料というバン屋だつた。時折、彼を助けて薪割りをした。こちらではこれが何より刺激となつて元氣が湧き出てきたのだ。―

つまり、この家でわたしは精神衛生上の理由で仕事に励んだのだつた。隙ができる、鋸を挽き、薪割りをし、薪作りに精を出した。ここではこの乱暴狼藉事に精出すか、はたまたブラウンシュヴァイクの相続問題に関する論文³を精読するかのいずれかに専念したのだ。この論文にいたつては携行する旅行仕度の奥に入念に仕舞いこんできたのだ。店が営業時間に入ると、わたしは浜辺のほうへ散歩に出た。

こうした保養目的の逗留というのは、一切が甚だしくゆつくりと間延びして過ぎる。家にあれば、家中をやたら歩き回り、天候がどうあれ、お役所町が散策用に整備した堤防までの遊歩道を一巡するというのが私の定められた日課であつた。ジュールトで食事を摂り、軽いお昼寝に小一時間を過ごし、それからまっすぐに浜辺沿いに北へ速歩で歩くのだが、時に「赤い断崖」まで足を延ばすことはあるものの、常はせいぜいヴェニングシュテットの海水浴小屋までと決めていた。

両性具有の逞しい洗濯女のように、海は何ひとつ自分のもとに留めることは許されず、一切合財を再び吐き出してしまうので、この散歩は散策のもつ魅力なく終わることは決してなかつた。なにしろたとえ私がいかな散策家であろうと、死んだアザラシを一種メランコリックな氣分に捕らわれながらうつ伏せに直してやり、そうしながら深い思ひに浸るおまけだつて不自由しない。

再び閑話休題。―いや今度のほうがむしろはるかに上首尾、本題なのだ。冒頭で話した人物と知己を得る話のことだ。このとき私は、南から北へ長く伸びた、あるいはその逆向きなのかもしれないが、とにかくひよる長い島にはぼ三週間、逗留した。

夕暮れ時のことだった。太陽はすでに沈んでいた。そして私は——今日は——赤い断崖のところまで足を伸ばし、戻る途中であった。さすがに少なからず疲れていた。というのも何しろ干潮が、ジュルト島に滞在する下半身に悩みを抱える患者たち用に最善の努力を払って、干潟にどうやらこうやら歩行可能な道にしたという代物なのである。相当に硬く叩き締めた砂の上を十歩行くと、次には二百歩行くほどに一歩ごとがぬかるみ、ますます深く足をとられてしまう按配だった。そこで私の妻や娘や従姉妹、あるいはこの報告をお読みの方の恋人などそうしたお方たちは健康にまことに結構で有益な道をしなやかに品よくかわしておしまいでしょうけれど、ともあれ私はこうした女性の方々には、実際、叙情的であれ、叙事的であれいづれかのお好みの詩人のほうを喜んでお勧めする。もちろんかかる詩人——地方裁判官レーネフィンケ氏を除いて——私の同僚の中に、友人、敵対者のいづれを問わず、つまりは私の顔見知りの連中の中に見出せると仮定しての話だが。わたしは、慥か太陽は沈んだと申しました。そこで私はこの言葉を訂正いたします。太陽は今、まさに沈みかけていたのです。——そしてわたしがヴェニングシュエットの南にある砂丘の巨大な窪地の向かい側にたどりついたそのとき、太陽は沈んだ。ブランケネス港かあるいはクックスハーフェン港かの漁船でしよう一隻浮かんでいた船も日没とともに水平線から立ち昇った霧のなかに消えていった。やがて混濁した灰色が、あの明るく晴れやかな眼に好ましい緑色の海の水から生まれ出た。砂丘を黄赤色に染めていた光も、健康にはもってこいだが、歩くには難渋する道の左手へ後退し、消え去った。そうやって灰色が

右も左も優勢を占めていった。砂丘の草は冷気を増した微風に小刻みに震え、囁き始めた。夕べが始まった。またたくまに夜の始まりが大地从ら芽生えて、可視の存在となった。

千鳥足のおぼつかない足取りは夕べの冷気にもかかわらず汗を浴びるほどにかかせた。私はいつもの夕べのパイプの足取りの方を早めることにした。そのときのことだった。予期せぬことが私の身にふりかかった。こうしてわたしは私の同業者、レーネフィンケ氏と知己を結ぶに至ったのだ。——

ジュルト島の西側海岸を知る人はだれもがよく承知だが、砂丘は、しばしば海際を通る砂地の健康遊歩道に向かってひどく急傾斜している。その最も険しい急傾斜の箇所のひとつで、同業者がわたしの首根っこを襲ったのだ。そして、生まれて初めて味わう激しい驚愕へ移し変えられた。敬愛する読者は、私に、私がこの報告書を普段馴染んだ平穩の内に些かの興奮の混入もなく、続行することをお許しくださいませよう。

わたしは、先にも申しましたように、巨大な窪地に向かう位置にいた。太陽はちょうど五分前に別れを告げたところだった。そのとき、突然、砂丘の高所、わたしの頭上ほぼ七十フィートのところに一人の人物が姿を現したのです。彼は絶体絶命、しゃにむに全速力で砂丘の庇まで駆け上り、夕陽の残光に向かつて両腕を高く差し伸べた。それからしゃがみ、いきなり、恐怖のあまりわたしの髪を総毛立たせるダビングを、ほとんど垂直に立つ砂丘の滑走を、——滑落音もろとも——矢のような落下を敢行した。

迸り出る恐怖半分そして全驚愕を入り混ぜた絶叫がわたしの体内を突き抜け、その残響音が消える以前に、伴の男はすでに砂丘のふもと、海で散々洗濯された挙句打ち上げられた半ば崩壊した樽の残骸と壊れた船のカンテラの間の柔らかな砂地に尻もちを搦っていた。その状態で、目を大きく見開き、驚愕に蒼ざめながらも、同時に、はつきりとにやりと口を歪めてみせて、私に、急ぎ駆け寄る者にむかって、視線を走らせるや、叫んだ。いや喚いた。いやいや、むしろ吠えた。

「彼が、—彼女が—わたしの背後にいる！主よ、どうかお許し下さい。しかし、—そもそもだれが奴の神経に逆らえるというのか—」

「えつ、だれが？なにが？いったい誰があなたの背後にいるというのです」と、わたしは灰色の砂丘の絶壁の傍に立ちすくみ、威しをかけてくる何ものかの方に目をやりもせず、叫んだ。相変わらずわたしの目の前の砂地に尻もちをついたままの格好でいる相当に肥満し、申し分なく上品な装いに身を整えた御仁の派手な滑落と度を越えた狼狽振りを正当化し得るものは明らかにひとつなかった。

「あなたの背後にいったい誰がいるというのですか。わたしの見たところ、だれもいませんが。あなたがおっしゃるようにはね。だれがあなたを追い立てたというのです。何がいったいあなたをこんなダイビングに駆り立てたというのです。わたしは真実、この上方にそんな影を微塵も見ませんが。」

「いや、いや。彼—彼女—月—ルナ—ゼレーネが—違う、違う、違う、ルナやゼレーネではなくて、彼、月、あの破廉恥なドイツの月がいるでしょ。いまちようど干潟の陰から昇ってきているのです。そし

て二・三分もすればあそのわたしの背後の稜線の上に懸かることになりません。そしてここには屋根もなければ、庇もない。雨傘ひとつもないのですぞ。おまけに次の避難所の海水浴場行のポンコツ馬車は十五分後なのだ。これがわたしにとつちや致命的なことなのです。」

雨傘を持ち歩くのはわたしの慣わしです、ほら、いまも。しかし、大混乱に陥っている初対面の御仁はそのことに気付いていなかった。それをこの愚か者に提供する前に、当然のこと、わたしは考えをめぐらしてみた。

わたしが気の狂った男を一人、目の前にしていることは明らか、法律家の目からしても明らかだった。そこですばやく私はこのような状況下ではどのように振舞うべきか考えをまとめた。彼の特異な虚構になんら変更を加えることができないという現実を前に、この男を彼の運命に任せて彼を取り押さえることについては彼の監視人たちにお任せするべきではなからうか、いやひょっとして彼との会話を続けて、個人的に不愉快なこの男との諍いに陥る危険を冒してまでも、現状に至った根拠を更に追及してゆくべきではなからうか。

人としてならば、私は最初のほうを優先させたかもしれない、しかし、法律家として、刑法学者として、後者が私を惹きつけていった。私は誘惑の差し招くままに、会話を続行した。

「もしもし、あなた」と、私は言葉をついだ。「もしあなたがあなたの—敵相手に雨傘があれば身の安全を囮れるとお信じならば、わたしは私のものを喜んでお役に立てたいのですが。私の腕にお掴まりください。」

わたしは絹の屋根をすでに広げていた。そして、この気の狂ったお方は忽ち喜びの声とともに跳ね起きたのである。

「おお、おお、ありがたい。あなた。天があなたの元へわたしを差し向けたのです。」彼は私の腕を掴み、帽子をとりながら、言った。

「しかしまあ、どうぞ私の名を名乗らせてくださいませ。私はレーネフィンケと申します。―プロシヤ王国地方判事です、大ハファウレンベルゲ管区の―。」

いまこのとき、私は完全に度を失って、脇に飛び退った。

「あなた様が、―まさか。」

「あなた様ですって。」

「貴兄が、月の出から遁走するために、首の骨を折る危険を冒して、ほらあそこ、あそここの場所にまっさかささまに墜落した貴兄が大ハファウレンベルゲ出身の地方判事レーネフィンケ氏だなんて。」

「いやいやもしそれを僥倖と名づけて下さろうと言うのなら、わたしも喜びと致します。わたしはいま名乗ったとおりの者なのです。」

わたしは自問しつつ、自制に大いに努めた。今となつては些かの疑念を差し挿む余地はない、これはいろいろ様な固定観念に執り憑かれた気遣いだ。不幸者が月を敵とみなしているばかりではなく、おまけに彼は無条件に自分を他人とみなすこともやっているのだ。

「左様、わたしの名前はレーネフィンケなのです。敬愛するあなた、あなたと今後も親しくお付き合い叶うなら、私は名誉なことと存じます。」

こういわれて、逆らってみたとてどうなるものでもない。私は自己

紹介を、つまり名前と称号とを名乗った。すぐさまこの気の狂った男は改めて帽子をとり、そして心をこめて握手する手に力をこめ、こう叫んだ。

「ああ、私の愛する御同輩。お分かりでしょ、運命が人々にどんな風に伴っているものか。本当なのです。十五分前の私はそんなことなど夢にも思はずなかつた。なんてことでしょう、私たちは既にかなり以前からの最高の知人だったというわけだ。しかし、まあちよつと思ひ出してみても下さい。わたしたちはヨハン・ペーター・ミュラーの件で、すなわちザンゲンザルツァ出身のジプシーの首領の件で書類を交わしたことがございませんでしたか、仕事上の書類を交わした中ではございせんか。いかがでしょう。どうです、お気に召しましたでしょうか。ああ、わたしのほうはもうすっかり結構だと思つてい

るのですか。」

これは夢なのだろうか、それとも現実なのだろうか。この男が狂っているのだろうか、それとも私が？

まさにことはこういう運びとなつたのだ。そして大ハファウレンベルゲのプロシヤ王国地方判事との書類のやり取りが実に明確に思ひ出された。しかしこの私の特異な同行者は（実際、私たちはすでに肩を並べて歩き始めていたのだが）、この事実の単なる明証と確認に依拠することだけに留めはしなかつた。断じてそうではなかつたのだ。彼は瞬く間に当該の事件の事細かな個々の点まで立ち入って、いまや頭のなかのすべてが、口頭で私の眼前に呈示された。つまり、以前、彼がわたしに書面で告げたことの一切がである。そして―わたしは、

まるで彼が疑う余地の残るプロシヤ王国の官吏であり、実際にレーネフインケ氏という名の者であるということは、私にとつてはもはや疑うべくもないことと心服しているかのように、彼との応答を続けた。とかくするうちに満月は、ほんとうに東の水平線に昇つてあつた。が、わたしの同行者は月に苦悶する気配を見せなかつた。腕をとりあつて、ヴェスターランドの海水浴場の方角めざして、散策を続けながら、わたしたちは自分たちの高い学問領域の世界にいよいよ深く関わつていった。月は好き勝手に輝くに任せていた。こうしてわたし達はもうほとんど紳士用浴場のそばまでやつて来ていた。いまわたし達は浜辺から砂丘の上へ向かう階段にさしかかつていた。最初の興奮状態はどこへやら、いまは最高度に明晰な頭脳と頭の切れる法律家として、その力量を私に披瀝する同輩は、突如、砂浜に突つ立ち、辺りを見回し、そして見上げ、精白者のようになりゆきながら、呻くように言った。「おお、神々、わたし達はいま只中にいます。」

それに対しては疑いようもなかつた。わたし達はまさにまっ只中にいたのだ。固定観念が新たに不幸者を包み込んだ。怒りに燃え、不安に溢れながら、彼はわたしの開いた傘をびつたりと帽子の上まで引き寄せた。そして、私、――わたしは彼を――地方判事レーネフインケ氏の肘を――もつと力を込めて押さえ込む以外、何もできなかつた。そして激しく憤りもがく男にきつい口調で熱心に訴えかけるほか為しようがなかつた。

「しかし、敬愛この上ない貴兄、お願いですから、落ち着いて。自制なさつて。これではあまりに突飛過ぎます、御同輩。いったいこの

無害な調査機関(原文: Recherchekommissionの意)のなにがそもそもあなたを苦し

めるというのです。あるいはあなたが何かそれに抵触なさる行為でもなさつたというのですか。どうか理性を持ち堪えてください、御同輩。しつかりなさつて得心なさいませ。無害なポールは徹頭徹尾、わたしたちの頭上に落ちてこようなんて顔をしていませんでしようが。」

「おお、わたしの頭。私の頭。」と、地方判事は当該の体の部分を両手で抱えて、呻いていた。

「いらつしやい、あなた。誰もあなたを駆り立てたりしていません。誰もあなたを追い立てたりしていません。なんとした完全に狂つてしまつた狂気の発作でしょう。どうか私を困らせないで。」

「誰もしないつて。だれもしやないですと」と、レーネフインケ氏は齒軋りしながら言った。

「だれもいません。それにお分かりでしょうが、たつた今、あなたはあそこから登つて来たばかりじゃありませんか。四阿屋にはほかに人も人がいるでしょうがね。――パーティ(原語の意はパーティ、には社会の意味もある)のようです。元氣付ける飲み物もあるでしょうし、何よりも貴兄の敵もこれに對しちや、少しばかり恐れ入るに違いない石油ランプというものが絶対にありますからね。」

「石油ランプ」と、レーネフインケはつぶやいた。高等裁判所でお慈悲をと悲痛な叫びを發する犯罪者さながらに、この言葉にすがりつき、確かめるようにつぶやいた。

「いいから、ちよつと耳を澄まして御覧なさい。四阿屋ではその上音楽も演奏されていますよ。あそこでグロッグ酒のグラスをしばらく

傾けながら、休憩するというのはいかがです。そうして——

「——そうして月の沈むのを待つ。そうそう、それが正解というものです。」

「それじゃ、少しばかりあそこに拘束されることにしますか。月はようやく四十五分ばかり前に昇ったばかりだし、明日の七時にならないきゃ沈みませんからね。しかし、まあ別の趣向もまた我々に顔を覗かせているようですよ。あそこを御覧なさい、海上に黒い雲が頭をもたげています。——御同輩、わたし達は雲が月にかかるのを待つとしましょう。」

「そうそう、それは上々。結構です、ただただ一重に承諾。御同輩、わたしはあなたの後見の下にいますから。ひとまず小屋のなかに入つて、雲がにやにや笑^④う化け物のまえに伸びてくるまで待つとしましょう。それじゃ、しばしグrog酒を一杯」と、興奮したプロシヤ王国官吏は喚声をあげた。そうやってわたし達は急階段を登り、首の骨を折ることもなく、高台に達した。右に曲がって砂丘の草むらを通り抜け、明かりが明々と照らし、楽音に振動する、海水浴客で満員の砂丘の四阿屋に向かった。

しかし、私たちが円形の木組みの建物の扉の中へ、一歩踏み込むや、その瞬間、突然、海水浴場の吹奏楽がはたと止んだ。楽士たちは彼らの楽器を仕舞いこむか、腕に抱え込むかしたのだ。彼らもビュッフェでサービスの無料シユナップスを一杯呑むと引き揚げていった。そして大衆の大半も奇妙な仕種で歩行し始め、彼らの後に従った。芸術の享受でそもそも端^{はな}から癒される必要などなかったかのように彼らの後

についていった。ただ分別ある男だけが、二、三のグループとなって依然として彼らのグラスを握りしめていた。

北海の側からいまや、かなり生きのいい風が吹いてきた。波が音を荒げていた。泡立つ波が白く丸い泡の冠となって海面を蔽^{おほ}った。腰を下るす前に注文を出していた飲み物が生気を与え、体を温め、必ず最善の活力剤としてわたし達の精神や身体の情報と心地よさに効果を發揮するに違いない。

今や、わたし達は腰をおろした。隣のテーブルでは上機嫌な一行が陽気に、おしゃべりを縦横に取り交わしている傍らで、わたしはこの新しい知人を盗み見するという体のもではなく、まさしく石油ランプの明かりの下でじつくりと観察を始めた。そしてわたしの驚きはこの徹底的捜査のもとで高まっていった。

大々ファウーレンベルゲ出身の地方判事レーネフィンケ氏はほぼ五十年配の、既にご存知のとおりかなりの肥満体であった。が、あらゆる点で法外に奇妙であるところはなかった。横にぐつと張った顎、短く刈り込んだ整髪は銀髪、プロシヤ風役人特有の口髭をたくわえ、二つの灰色の目は賢明そうな眼光を放っていた。輝く視線は鋭く、しっかりとことごとくの対象を捉えていた。両眼は確固とし、どれをとってもこの者を精神病院候補生と見做すいかなる理由もわたしに与えしなかった。だが、——私はそれを抑えることはできなかった。わたしは手をこの同輩の腕に当て、ぴったりと引き寄せながら、こう口を切った。

「どうか私のことを悪くお取りにならないで下さい、レーネフィン

ケさん。しかし、ここ、このときに至ってはもはやそのことが信じられないのです。」

「なにが信じられないのですか。」

「こうなるまでの貴兄の出現がです。あの――つまり、砂丘を跳び越える命がけの逃亡、すなわちヴェニングシュテットでの滑落行為、あの――手短にいえば、貴兄の月との敵対関係を信じ難いのです、御同輩。」

するとたちまち、わたしの横にびたりと密着して坐っていた人物に異常なほどの変化が生じた。彼はもう一度身を縮めて、先ほど同じように私の雨傘に手を伸ばし、そして今度は目の前のグラスを挿んだ。その中には熱い湯気を立てるワインがはいっていた。一気に彼は飲み干し、齒の間から小声で押し出すように話し始めた。

「しかし、実際そうなのです。わたしは月を憎んでいるのです。彼は不倶戴天の敵なのです。わたしは月に逆らって負けたのです。月があそこの私たちの頭上にぶら下がっているランプに負けたように。」

わたしはウエイトレスに合図した。彼女は私の合図を理解し、同輩の鼻先に二杯目の湯気の立ち昇るグラスを置いた。

「ありがとうございます」と、地方判事は言った。「あなたにもお礼を言おう。わたしは最前あなたとあなたの雨傘の下に転がり込んで助かったのですからね。そういうわけで、この物陰のない砂浜では、一体なにが私の身に起きるのか、真実、知れたものじゃないのです。」

「あなた」と、話を引き取った。「わたしは平静な男です。長年月勤めた職務にも、また前任の役所にも一応の満足もし、職務を遂行してまいりました。私の自宅の引き出しの中には国家勲章も入っており

ます。私に明かされた秘密に対し課せられた約束を守らないなどということは、決して致さず過ごしてきました。もし貴兄が、我々の罪のこの世、つまりは地球と無実の取り巻き、つまりは月みたいなものですが、そいつと揉め事に陥ってしまったというのなら、どうかそれ私にお明かし下さい。そう申し上げますと、ひどくお気を悪くなさいますでしょうか。」

「わたしは断じて立腹などいたしません」と、同輩はいった。「その反対なのです。折に触れ、わたしは、私の憎しみと怒りと、そしてまことに遺憾ながら残忍極まりない苦悶と不安と、感じやすい魂に逆らっても、一息入れなければという極度に緊迫した必要を感じるのです。ちょっとその前に、貴兄もグロググ酒を一杯お飲みになって、それからお聞きください。そのあとでご判断なさりたいようになさり、そして貴兄の下す判決を信頼することといたしましょう。そうすればそれだけ一層、有能な司法家として職務上の書類を取り交わしたことがある以上の個人的な親しいお近づきになれるというものです。」

「まったく並外れた結びつきでございますね」と、私は極度に神経を集中させながら語り、いまその同輩の眼を覗き込んだ。だが、それは二十五年前、わたしの花嫁の目の奥を見つめたときは違っていたのだ。彼は、湯気の立つ飲み物に口をつけ、すすりながら話し始め、洗いざらい告白した。

「まず最初に」と、彼は言った。「私の医者が、まさにこの私の状況のゆえに、もちろんそれは妻の言い分ですがね、妻の後押しで、この海水浴場に送り込んだということを前もってご注意申し上げねば

なりません。— 医者の言い分はわたしの神経の故にというのですが。長い付き合いのこの男は、少年時代からの知り合いで、— いっしょに成長してきたのですが、こいつはこの状況をあざ笑っていたのです。

— 妻がこっそり打ち明け、初めてこの男にもことの次第が憂慮すべきことに思われたというわけです。急に彼は、いまこそが遺憾な状態に対処すべき分水嶺に立っていると覚ったのです— そういう次第で私はここにいるのです。それで毎日の海水浴を義務付けられ、通っています。そして今までのところ、些かも効果なしというわけです。本題に戻れ。— 一言で云えば、青年の日の罪の贖罪をしているのです。」

「ああ。」と、私は口の中で呟いた。しかしながら私の同輩はすぐにわたしの気持ちを悟って、深い思いに満たされ、首をふった。そして溜息をついた。

「おお、いや、いや、そうじゃないのです。ああ、もしその通りだとしたら、私はなんて幸せ者だったでしょう。貴兄が思っていることのちょうど逆が私の混乱の原因を形成しており、そしてそのことこそが、私の地獄なのです。保証できますけれど、私の若き日に身に起きたことは酒でも女でもないのです。わたしはたまたま堅物すぎたのです。今日でもなお悲嘆と苦痛に身をさらし、ジュルトの浴場着を着ていてもそれを後悔しているってわけですよ。おお、いっそ私の青春の日々に爆発する感情の狂おしさを味わっていたならば。私のファンタジーの首根っこに拘束紐を投げ、手綱をもって、首の骨を折る危険を正鶴時に我が身に引き受けていたならば。御同輩、御同輩。私を狂わせているのはまさしく抑圧された詩なのです。その後、— 四十年の人

生を経て、なんとほるばると狂気がやってきたことか。ドイツの月光が私に復讐するのです。そして私は、やれどこその温泉やら炭酸泉やら、あるいは硫酸鉱泉やらがわたしに効くなどというけれど、疑っているという次第です。」

「ドイツの月光?」

「もちろんですとも。六度だつてヤー(独語、英語のイエスの意味)」といますよ。月がわたしを私の理性から引つ張り出し、にやにやと笑いかけるのです。この大々ファウーレンベルゲのプロシヤ王国地方判事フリードリッヒ・ヴァイルヘルム・レーネフィンケの私に、にやにやと笑いかけるのです。わたしは私自身の罪の償いばかりではなく、そう断じて違うのです。私は、その上にも、あの輝きを放つ人非人に対して負った直系の数え切れないほど幾世代もの祖先の負債を少しずつ返済してゆかなければならないのです。おお、御同輩のあなた、私は置かれた立場上、非常に不幸を感じているのです。」

「御同輩、貴兄はいずれにしましても大層興味深い人物です。最高に神経を張り詰めた上で、心の全力を傾けて、もつと詳しくお話し願えませんか。」

「わたしがお話したかったのはそのことなのです。私の父は王にお仕えする官吏でした。私の祖父も同様です。恐らく曾祖父、その前の幾代もの祖先たちも王に仕えていて、疑おうとしようものなら、たちまちお笑い種ということになりました。当然、私どもは皆と同様、田舎の地方管区長といったところです。わたしの母親はいわゆるドイツ女性でした。祖母も、当然ながら曾祖母も負けず劣らず、そうでし

た。彼女たちも揃って王に仕える地方官吏一族という出自でした。詩については彼らは知るところは何もありませんでした。彼らが月に関心を寄せるとすれば、ただ、彼らに散髪の日と瀉血の日を告げるという一事あるのみで、そのときに限り、月は愛想よく迎えられたに過ぎません。おお、彼らはなおざりにする償いをいとも簡単に私に委ねたのです。―わたしの母はクロレン(7)を読み、祖母は聖書と聖歌集を読み、曾祖母は恐らく文盲であったでしょう。わたしの男系祖先はというと、彼らの書類を読み、書くこと、役目上の文献を読むことでした。恐らく新聞もその中に入っていたでしょうが。私自身もつい最近まで彼ら実務家の系譜の申し分ない子孫であったのです。そうこうしているうちに四十八年(命の年)がやってきたのです。そして月が私のために昇ったのです。

「ああ。」と、私はふたたび声を上げた。しかし、同輩の地方判事はまたしても頭を振って、次のように語った。

「いえ、いえ。十二度だつてナイン(幾何学)を繰り返します。貴兄は先ほどよりもっとひどい思い違いをしているでしょう。あなたは、わたし達が『アルトリベラル』(8)ということばを聞けば、何を理解しあうかお分かりでございましょう。

私は首振り人形の支那人形と同じエネルギーでただ頷いた。

「貴兄はそういう風になさりながら、アルトリベラリストならば月を憎んだり、月から遁走したりなんてことからむしろ距離をとるはずではないかと、そう私に認めさせようとしておいででしょう。」

この譲歩をしなければ、私はひどく愚かであるようにおもわれた。

そこでそうしたが、しかしこう問い返しもした。
「貴兄はその一八四八年三月にはいったいお幾つでいらしたのですか。」

「ちょうどプロシヤの司法研修生の年齢に達していました。」

「ブラボー。どうぞ、お話を落ち着いてお続け下さい。」

「三月のこと、月はこのように屋根のうえに現われて、ベルリンの私の小部屋にも月光を差し込んだのです。そこで私はよく言われるように、信じるのができなくて、眼を擦すったのです。わたしは若者(註9)らしく危険の予感というものを持たなかつたのです。しかし次の年の四九年にはそれについては予感以上のものを獲得しました。興奮した国民集会で頭に血が上ったまま家路につき、熱い頭のまま、窓脇のベンチに身を横たえ、そのまま眠り込んだのです。そして数時間過ぎるうちに、陰険な天体が私の頭を照射したのです。」

「それで？」

「それで次の朝には、おおかたの物事や人間に対して頭痛ばかりではなく、あの人口に膾炙された嘔吐までもが生じたのです。これら事物や人物は、こういうことがなければ、わたしの感覚、感情、敬意のすべてにおいて非常に高い位置を占めていたのでした。詩が芽生え、ほとぼしり出てきました―そして、―御同輩、生の詩がひとりプロシヤ王国の司法候補生の身に起き、突き破つてあふれ出るまでになるという事態そのものがそもそもどういうことを意味するのか、お分かりでしょうか。」

「いいえ、ありがたいことに。どうぞ、わたし達はその折々、国境

を越えて文書の遣り取りをしていたに過ぎないという事実をお思い出しください。」

「その通りです。私もその件に関し、今日ここでお話できるなど知りもしませんでした。あなたは夜通し市民権や国家法について平静に、堅実に夢見ていらしたのです。そしてあなたは目覚め、あなたの夢の内容を再びやり過ごさせてしまおうと努力したのです。あなたはそのことにあまりに見事に成功してしまつた。そして悲嘆が始まつたのです。あなたは枕に頭をつけたままの姿勢でああなたの蔵書のほうへ目を転じた。そして突然、強制されてというわけでもなく、跳ね起き、がらくたの全部を腕の中に抱え込んで、——そして——そして——物事を——それに関わる言い表しがたい物事を企てようという愉快な気持ちがああなたを引つとらえたのです。ところがあなたは自制した。というのもこの混乱にどれくらい費用をつぎ込んだかという考えがああなたの頭に突如浮かんだからです。——あなたの将来の昇進のために幸いにも自制をかけ、あなたの珈琲の準備にかかつた。そうしながらあなたは、あいかわらずそれ相應の報酬も得ずに国家の好き勝手にさせているという観念を、ぐらぐらと暴力的に顛覆させつつ、理解する。するとおまけにもう一度、はらわたばかりでなくああなたの安酒までもが、煮えくり返り、ふきこぼれる。そして——今となって、あなたは一方を貪り食い、自分の身の内に取り入れ、もう一方も雨樋に流し込みもせず、同様に自分の中へと流し込んだ。——あなたは幻想を失い、自身自身を新生させる。するとご覧なさい、あなたはわたし達の敵の作用を受けているのです。あの月のね。そう、あなたは風変わりな幻想とな

り、そしてあなたは、自分自身が風変わりな最たるものであることを恨みに思つてみるなど全くしなくなるのです。——その後でああなたは役所へ向かい、途中であなたの上司に出会い、きわめて慇懃に挨拶をする。そして今また——一挙に——別の夢がああなたを襲う。窓を開け放つた部屋で、頭を横たえ、月がああなたの頭部を照らすとき、あなたが夢見ていたものが何であるかを、あなたは思い出す。あなたは立ち、大統領のことを思い描き、事細かに検討を繰り返す。そしていま、たった一人で孤独にドイツの月の罪のあわいを抜けて、あなたという人間ののために、あなたの祖先以上に重ねた読書の数々があなたの脳裏に浮かび上がる。この新聞、あの新聞といった特定のものはなく種々の新聞が、それ以外にもシラーやゲーテが、ヴォルテールやルソーが、ベールネやスタールが、ランケやラウマーが、そして同一尺度で測ることのできない最新の、最高にリベラルな詩の混淆が。そして学生達の馬鹿騒ぎのとき、大学の各地で酒を酌み交わしながら歌われた種々のことが思い出された。物柔らかな、愛らしい月は、ひよつとすると朝ぼらけの淡い青色の天空で優美な利鎌のようにあなたの上にかかつているかもしれない。おまけにそいつは皮肉な笑いに口を歪めている。それから大きくなる——成長するのだ——新たな満月になるまで成長を続けて行く。そして一方で、あなたは日に日に、週を追うごとに任務に専念していく。あなたは際限もなく、不愉快な感情を覚え、あなたは自分にとつて言いようもない愚かで、無意味で、無粋なものともみえてくる。が、尚もますます調書を愚かしく取り続ける。これらの代償に完璧それ相應の鼻を得る。この最後に列挙したものと連れ立つてご帰

宅あそばし、偶然にもあなたは毛髪の薄くなった鏡の中の姿を目にする。そのついでにあなたの口ひげにも白いものを発見する。そういうときになって初めてあなたのおよき友人、月にも完全に好都合のときとなるのだ。なぜって月こそが他の何よりもそのことをあなたに確實に理解させ、より簡単に彼(男尊女卑の月とは代名詞、彼なる)への道をたどらせることができるというものだから。その後からは、あなたがまた孤独に、夜中、窓際に座ろうものなら、月は髪のことを思い出させてくる。あなたはあの胸ことを、繊細優美で感情豊かな、柔らかな胸のことを憶れてみる。その中にあなたの辛い思いのすべてを払い落とし、それに向かってあなたの傷心を告げ、あなたの腹立たしい気持ちと怒りを告げることができるあの胸を。あなたは目覚めながら夢を見、月は以前よりもまして怒り、高く嘲笑する。」

「ちょっとお待ち下さい、レーネフィンケさん」と、私は両手を額に押し当てながら、叫ぶ。「そもそも通常、まずは最初にもう一方の対象の人が登場し、それからある人物にその人物の最高に固有である過去、現在そして未来の状況が明快に客観的に披瀝される、そういう運びでなければならぬのじゃないでしょうか。しかし、まあ、御同輩、あなたは完全に正しい。—あなた御自身同様、神経を尖らせて、あなたの悶着の跡に従ってまいりましょう。どうぞ、先をお続け下さい。—実際、月は怪物でございます。」

「そう、月って奴はまさにそれなんです。とりわけこのドイツの月ってのは。ほらあそこの屋根の上に奴は顔を出しています。そしてあなたの頭はちゃんと肩の上ののつかっている。そして精神薄弱のように

当惑げに幅広の奴の歪んだ顔にウインクしながら見入る。すると突然、高く穂の伸びた麦畑があなたの目の前で揺れる。ナイチンゲールか、そうでなければ何でもよい他の小鳥が茂みの中でピーピーと囀り始める。沼はきらきらと輝き、小川は眩く。御同輩、あなたも同じようにぶつぶつと眩き始める。あなたは何を眩いでいるのですか。もちろんいづれ美しい響きの洗礼名ですがね、EかあるいはAでゆつくりと静止するそうした名前を、—例えばクロティルデ、ヨゼフィーネ、マリーア、アマリアといった名前を—どれが誰なんていうのです。どうでもよいことです。決定的なことは、月があなたを所有しているということなのです。—月があなたに關することすべてをひっくり返して、あなたを所有しているということなのです。この性悪でずる賢い、陰でこそそする奴、この月め、このドイツのつーきめ。あなたは奴をあなたの友と呼びたい、奴に向かって腕を差し伸べ、奴に感涙を注ぎたいという気分を感じるので。そうするとあなたはもう四の五の疑惑を差し挟む必要なく、際限もなく笑いにされるといふ段取りです。」

「そうです」と、私は言い、それ以上何も言わなかった。同輩は、しかし、新たに口を開き、話の先を進めるときが至るまで、かなりの間、メランコリックな深い物思いに沈んで、黙りこくっていた。

「軍隊組織の紛糾⑩が続いている間、陛下は宰相に有名な象徴の杖を授けられた。そのとき、私は州議会議員でした。私は当然のことながら過半数の声に賛意を示し、いまは、—そう六七年の今日に至っては—わたしはソネットをものしたので—考えても見てください、ソネ

ことをお許しにならなくてはなりません。それ、四阿屋の前の屋外ではドイツの月光のなか、大地と海の水があんなにも美しく横たうというのに、こんな蒸気のもつた部屋に座っているなんて罪です。さあ、行きましよう。飲み干しなさい。さあ—」

「貴兄はそれじゃ、もう恐れてはいないのですか・・・」

「わたしがなにを恐れなければいけないのです。親愛この上ない親切な友。いまこそが正にそのときなのです。月がわたし達みなに打ち勝ち、そして月の光の中でわたし達みながわたし達の勝利を得るのです。」

「ケーニツヒグレッツの戦闘も然りですか。」

「その戦いもです。それにも異を唱えなければならなかったかもしれないなかつたのです。さらに将来の奇妙な大勝利の戦の場合も同様です。ああ、どんな空気が流れ、どんな光が流れるのか。どうかもう一度砂丘をいっしょに登り、聖なる海原を眺めてみることにしませんか。」

「その後でまた月光の只中にいながらも、貴兄の人生のその後の進展振りをお話くださいますでしょうか。」

「結構です。喜んで、早速にも。わたしの意見に依ればそれはもはや全く必要なことですから。お分かりでしょうけれど、親友であるあなた、事実というものは厳然とした恐怖でもあれば明快な心地よさでもあるのですから。一月は、時折り、プロシヤ王国の司法官レーネフィンケを圧倒しましたが、後者、即ち司法官のほうは、結局のところ、彼にうるさく付きまとつた酩酊と千鳥足に關し、ほんの僅かであれ異議を唱える必要はなくなるのです。そうなのです。わたしは

ドイツの月光に曝されていても一人のドイツ娘を見つけたのです。娘の両親の同意を得、その娘と婚約し、その後、結婚することになりました。今日では、十八歳の娘のおまけまで付いてなんの異議申し立ても受けずに済む状態なのです。恐らくわたしはこの後でふたりの女性をあなたに紹介できることでしょう。」

「それじゃ、—それでは、あなたはほんとうに一人ではなかつたのですね—野放しにされてここジュルト島を彷徨していたわけではなかつたのですね。」

「全然、違います。わたしは妻と娘といっしょにあちらのヴェスターランドに逗留しています。彼女達の監視のもとでこちらへ海水浴に来ているのです。あなたはまた何か考えておいでですな。」

「どうかわたしの愚かしい質問をお許しください、御同輩。今日はなんともすばらしい夜で、誠に喜ばしい出会いがあり、単に興味深いなんてものじゃない、遙かにそれを超えた会話でございました、それで一切が結局、許されることでしょうけれど。」

「どうか気を落ち着けてください。わたし達は完全に互いに理解しあいました。わたしも貴兄を、関心をお寄せくださる前から、実は既に一日中、見ておつたのです。貴兄は人間としてわたしの目を引いたのです。そしてすぐと貴兄が司法官らしいことに気づいたのです。運命が先ほど来、わたしを意図があつてということでもオールマイティの権利あつてということでもなく、貴兄の腕の中に滑り込ませたというわけです。わたし達は今夕、互いに心底を照らしあいました。これもすべて一緒くたにして保養目的に含まれ、また大部分、汐の水の効

果というのでしょうか。しかし、月は――わたしは絶えずこと新たに輝く月に貴兄の注意を喚起しなければなりません、私は月の枷いまたに縛しばめられており、その中に居続けなければなりません、死が解き放つまで。御同輩、月により、現在という時代の世界情勢の幫助を受けて、わたしは――わたしの家族の中で詩人となつてしまつたのです。貴兄はそのことを完全に把握し、わたしを完全に理解してくれたのです、海岸でのわたし達の出会いのときの私の心の状態のときも、また同様にいま目の前のこの瞬間のわたしの精神状態のときも。」

レーネフィンケは彼の家族の中では詩人であつたのだ。私は数歩、後退した。氣のふれた人物が、月光に照らされるジュルト島と同じ明白さでわたしの目前にいるにもかかわらず、そのことばは、しかしわたしの心底を冷やした。二等砲兵が火繩銃の火種を吹いて煽る様子を、ロルネット(氣取つた精神の職業)を目の前にかざして、観察していたに過ぎなかつたのだが、まことにひとりの人間の肝を真底寒からしめる大砲の轟音だつた。

「わたしが、極まるどころなき散文の継承者であるこの私が、」と、同輩は先を続けた。「月が水平線上に顔を覗かせるたびに、わたしは私の敵と月に征服され、いかなる制動装置を働かせ、進退窮まらせようとも、陥落していったのです。わたしは政治分野においては理想主義者であり、わたしの家政を指揮する段になると詩人なのです。わたしは私のヘクサメーター(1)やオツタフェリーメ(2)の韻を踏みながら私の收支決算帳をつける時代がやってくるのをみているのです。わたしは情緒や和やかな居心地にひと時の流れに身を浸しながら、熱狂しているの

です。そして、――御同輩、御同輩――わたしは私の女たち――わたしの淑女達には理解されないし、わかつてもらえもしないのです。私の神経を錯乱させ、わたしを彼女達の――わたしの淑女たちの――導くままにこちらへ、ヴェスタラランドへわたしを送り込んだものは、まさにそのことなのです。それにしてもそろそろ帰宅しませんか、だんだん冷え冷えとしてまいりました。」

彼はわたしと腕を組んだ――最高にこまやかな愛情をこめて。こうしてわたし達は腕を組んでジュルトの月光に輝く荒野を越えて歩いた。わたしの生涯を通じ、詩人のプロシヤ地方判事と肩を並べ、歩調を合せて行進することなど一度もないことだつた。彼、異常に興奮した同輩は大声で、雄弁に話すほどに、ますます声高になつていった。彼は真実、驚嘆の念を生じさせる博学ぶりを發揮して、ドイツ語でまた外国語で抒情詩を披瀝した。月に対する詩は、自由の頌歌へと、もつともな敵であれ、ありそうもない敵であれ、敵と名のつくすべてを敵にして戦いを挑む戦闘の歌へと入れ替わつた。熱帯の風景や雰囲氣の描写は、有名、無名の物語詩やあらゆる歴史的であれ、非歴史的であれ様々な内容をもつバラードから引用した細切れの詩句へと交錯し進出した。レーネフィンケは神々しかつた。そして彼の敵、月は現実に彼を好きになつていたのかも知れなかつた。しかし、彼や私の上司のひとりととは云わず少なからぬ者たちには、この状態の彼は、美德の点というに留まらず、身体的にさえ吐き氣を催させたに相違なかつた。遠く北の方角で、野営地の灯台が明暗を繰り返しながら、どこか幾分度を越した滑稽な男に、周囲の者の注意を向けさせようとする嘲笑家

の目のように瞬きしていた。わたし達の足をとった家畜繫索用の綱、つまりは拘束紐の所有者の荒地に飼われた羊たちが立ち上がり、不思議そうにわたし達を見つめ、驚きのまなざしで見送った。

こうしてわたし達はますますヴェスターランド村に近づいていった。しかしながらそこへ到着する前に、呼び止められたのだ。横あいからの出現といい声音といい、この上なく愛らしい方法で、夢うつつの夜と月光の彷徨から引き裂かれ、わたし達は現実の世界へ一気に呼び戻された。幸いなことにふたりは砂丘の庇から転落しはしなかったのだ。

荒地の大地の膨らみの上に、月の輝きが生み落としたかと紛うばかりの並外れて優美な、しなやかな乙女の姿が行く手目前にあらわれた。完璧に魅力的な容貌かおが、真実、月光に包まれてお伽話ながらに愛らしくわたし達にお辞儀をした。大々ファウーレンベルゲ出身の地方判事レーネフィンケ氏はいわゆる魅力的な容貌を誇り得る人物とは言い難かったが、しかし、実直で、幾分、陽気ささえも備えた容貌の彼が、そして、まさについて今しがたの興奮がいつもより数倍美男に輝かせていたというのに、いま、彼が自分のかわいい娘に見せる表情はそれだけに一層烈しい驚きをわたしに与えることになった。一段と輝きを増して明るく、ますます幸福そうになると思いきや、表情全体が一瞬に弛緩し、無表情へと崩壊してしまった。そしてすぐにそれはあ不機嫌な皺くちやの混乱へと陥ってしまった。

「ようやくそこに帰っていらしたのね、パパでしょ。まあ、じゃ、お話ししなくっちゃ」と、ゲルマン神話の妖精のお姫さまはわたし達

に近寄ってきながら、叫んだ。

「そうだよ。ようやく帰ってきたよ」と、同輩はぼそぼそと言った。「そしてこちらは一」

彼は最後までいかなかった。というのもその若い淑女が彼のことを遮ったのだ。

「ほんとうにわたし達、長いこと待っていたのよ、パパ。ママもパパに随分、怒ってしまってますよ。」

「そう、フン」と、同輩は呟いた。そして「フン」と、私も心の奥底で言った。

「こちらへいらっしやい、ヘレーネ。いっしょに帰りましょう」と、美しい娘の父親は宥めるようにいった。ただ月光のなかでエルフ(ゲルマ神話)だけはなおも、近寄りつつ、切り口上に言った。

「ありがとう、パパ。私はママといっしょに行きます。ほら、そこに来ていますわ。どんなに待ちくたびれたことかしら、ママがお話なさるわ。ママ、パパがとうとう見つかりましたよ。」

もちろんだとも、彼は実際ここにいる、父親レーネフィンケは。しかし彼はもはやこの瞬間からドイツの詩人を引用することもなければ、外国の詩人を諳んじることもなくなった。その一方で、同じようにドイツの月光の中を通り抜けてママがやってきた。いや詳しく言えば、相当に足早、且つエネルギーであった。私は好きにしてよければ、彼女が傍に来る前に、退散したいところだった。しかし、同輩は私の腕を、真実、地方出身の竜騎兵の握力でがっしりと掴んで、囁いた。

「ああ、貴兄を紹介しなければなりません、お友だち。どちらかへお行きになりますのでしようか。御同輩、どうか私の家内を紹介させてください。」

わたしは、同輩夫人とお知り合いになれるというこの最大級の憧れを除いて何か外のことを口にするなどできただけでありましょうか。

ヴェスターランドの集落の最初の家並を抜けて、歩を進める上品な夫人はいまわたし達の元へやってきた。そして娘の腕に手をかけ、当然ながら、まずわたしを眺め回した。それを完璧に済ませると、専ら家族的な用件にかかっていった。

「それじゃ、遂になのね、レーネフィンケ。あなたのかつての、いつもの無思慮なのですね。でもわたしはあなたに申しておきますけれど、レーネフィンケ。」

「しかし、愛するヨハンナ、ちよつとご覧。私の友人にして、かつて文書を交換したお相手の方を紹介しておきたいのだが——」

こういうふうにして、ひとが、リユーマチ患者の肘掛け椅子と隙間風の間に、スペイン風屏風として、押し込まれることは珍しいことではない。紹介騒ぎが行われ、わたしに割り当てられた役割を果たしながら生来のお人よしをお添えして隙間をびつたりと埋めた。二、三の上品なことばを交わしたあとで、わたし達はいまや四人となって、しかし互いに肩を並べてだが、実直げに立つ背の低い、平穩なフリースランド風の家に近づいていった。これまで、わたしの同輩の精神状況に関して最後の一点がどうしてもわたしには不明であったのだが、いままさにその一点が、この短い道のりの間に、完全に歴然としたのだ

った。

おお、なんと月は、ドイツの月はこのふたりの女性とプロシヤ王国の地方判事の上に笑いかけていた。おお、月はみごと復讐する術を心得ていたのだ、まぎれもなくドイツのこの月は。月は自分の手段をもっていた。そして自分の手段を用いる術を知っていたのだ。私の友人レーネフィンケは完全に正しかった。幾世代もの遺産を、何百年もかけて継承されたものすべてを、予め財産目録に記載された財産状態に債権者に認められた要求を制限するというローマ法の恩恵を利用することを許さずに、相続していかなければならないことは悲惨のひとつとにつきた。あの蒼白い満ち欠けをする奴を最初は気に留めもしなかったのに、次には軽蔑する羽目になり、そして仕舞いには大した抵抗もせぬままに影響下に引き渡され、ついに進んで身を捧げる仕儀となるうとは、それは懊悩であった。身の毛もよだつほどの恐怖と驚愕をまるごとそっくり我が身に引き受け、体験するために、まさにひとはまず一人前の男に——ドイツの成人となり、官吏とならねばならないのである。ヨハンナ夫人とヘレーナ・フィンケ嬢は、人間にむかつて差し出される月の要請などいちいち斟酌することなく生きてきた彼女たちは、月の側に身をおき、同様に月の軽蔑者の廉を以って彼に復讐した。彼女たちがどこまで、夫であり父親である彼を貶めることになろうかにいたっては、予想さえできない。——彼女たちは彼をすでに深く十分深く押し込めていたのだ。

私はだいたい夜も更けた頃、再びわたしのパン屋の隅に座っていた。こうしてわたしはこの日一日の体験と経験のゆえに半ダースのパイプ

を煙にしてみました。そして真夜中も近くなるうとうとき、私は、ただいまゲッチンゲンで数学を専攻する息子にジャン・パウル・フリードリッヒ・リヒターの全集の一冊を彼の誕生祝いに贈ろうと心に決めた。

註

- (1) ラーベは一八六七年八月ジュルトへ保養を兼ねて旅に出る。家族とともにティンヌムに逗留する。
- (2) ドイツのユトランド半島の西側に位置する北海沿岸にある北フリース諸島最大最北の島。この島まで大陸から鉄道が一本通じ、現在では自家用車を駆ってくる保養客や観光客を乗せた観光バスを載せて運ぶ。古くからの海水浴場を有する保養地である。
- (3) ブラウンシュヴァイク公ヴィルヘルムは世継ぎがいなかった。一八八四年に死亡する以前より、後継者問題が周囲の者たちの気掛かりの的であった。そもそもハノーファーカンパーランド家に相続権があったが、一八六六年の戦争―(ハノーファー家はプロシアに併合)―の終結後、要請通り正式にハノーファー家に対する彼の請求権を放棄せざるを得なかった。ブラウンシュヴァイク家は一八八四年を以って消滅。
- (4) ラテン語の月。ローマ人たちの間で祭祀される女神
- (5) ギリシャ語の月。ギリシャ人たちによって女神として祀られた。
- (6) 原文では *Stinson* という動詞の現在分詞の形で用いられている。進行中の話に別次元の要素を加味しようとするとき、この語はそのことにおいても顕著である。読者はその持ち込まれる異次元の世界をすばやく感受する姿勢をとるのであるが、その加味されるものとは何かとみると、人間の力では抗し難い何かの力の暗黙の内の存在、偽装の

ための神話要素混入である。背後にある絶対的であるが故に、暴力的に見えぬ力を感じさせる効果をもつ。

(7)

ハインリッヒ・クロレン、カール・ホインの偽名。(1771-1854) かつて多くの読者を獲得した浅薄な内容の、しかも遠まわしの欲情をそめるような物語や小説を主とする。

(8)

ここでは、いわゆる進歩党に代表される後期自由主義のかなり急進的な要求を掲げ、現実政策の方向をとる依然として自由な基本心情が意味されている(以上、全集編者カール・ホッペの註)。註(9)を参照すると理解が容易となるが、いわゆる「三月前期」に始まる「三月革命」の発端からラーベの執筆当時、即ち一八七二年までの歴史的背景が移が集約されている一語である。こうした社会的、歴史的背景を踏んでいることがラーベ文学の翻訳と普及にとって厄介な障害となっている。いわゆるゲゼルシャフトクリティカーとしてのラーベ面目躍如たる部分である。

(9)

ドイツ語で「若者」に当たる語は他にも存在するが、^{ブルシエンシャフト}学生組合を歴然と示唆するこの語を使用している。ドイツの自由主義の揺り籠であったブルシエンシャフトは、カールスバートの決議に基づき一八四八年の三月革命までの段階で「革命的である」とか「煽動的である」という嫌疑をかけることにより弾圧を可能にするという一面と、同時にナショナリズムと自由主義思想を育てるといふ裏面の動きをもともに象徴的に担っていった。一八三五年「若きドイツ」グループの禁止令、千八百三十七年、ハノーファで起きた「ゲッティンゲンの七賢」事件など一連の動きを背景にする作品であることが、直感できる作品である。この事件におけるハノーファ領主の仕打ち、即ちグリム兄弟をも含む総勢七人の教授が職を解かれたことを以って、一般民衆をも巻き込み、民族の自由主義運動の広がりとなった。事件はドイツ統合の願望を核としており、やがて紆余曲折を経て統一方式をめぐる大ドイツ主義と小ドイツ主義の分裂へとなだれ込んで行く。プロシヤを中心とした「小ドイツ」方式として歴史が刻まれたことは周知のことである。この一連のうねりの中の三月革命で敗北を喫した派を旧自由主義と呼

ぶ。註(8)に記載するドイツ進歩党は自由主義左派が旧自由主義者と袂を分かつて、四八年革命時の民主主義者とともに一八六一年六月、新規に結成した党である。このように大きな流れの中にあつて十九世紀のエリート集団のブルシェンシャフト、あるいはブルシェンは旧自由主義とドイツ進歩党の二派に分かれようと両派は共通の民族主義と国家統一の思想的運搬人を示唆することばであることに相違なかつた。

- (10) 軍隊組織をめぐる政府と議会の紛糾対立 (1862/66)
- (11) 原書中、この箇所6行ほどに頭WとVをもつ単語を繰り返して、いわば一種のことばあそびをしている部分であるが、それはこの発話者の人格像を描き出す技法ともなっている。
- (12) 語源・ギリシャ語。六脚韻と呼ばれる詩形
- (13) 語源・イタリア語。十一シラブルの八行詩。
- (14) ローマ法で定められた権限。債権者からの妥当な要求はこれを財産目録に記載された状態に制限する。本件の場合、月に対し、月が現にあるものの状態に制限して行くということは絶望的である。というのも、人間が心情的に月の虜になるという事は広く芸術分野において依然として永久に存続しつづけるものであるから。「カール・ホッペの註のまま」

あとがき

本稿の冒頭でカフカの系譜のなかのラーベをまず提起した。もちろんラーベが先駆する作家である。この指摘は私が一人でも、また最初でもない。が、私がこの作品によって初めて確信を得、論文を書く決意をさせたものであることは言うまでもない。これを聞いて、カフカ研究者は即座に、「カフカの先駆者たち」という有名な論文を想起するであろう。彼の論を引用するにはあまりに余裕がない。

それに代えて、要約して語る池内紀の『カフカ短編集』の解説に触れておく。――まるで我々は別のテキストを手に行っているのだが、そこに歴然とカフカの特徴を見えしなう。それは、「カフカの作品を読まなかつたら誰ひとり気づかなかつたはずの目に見えない系譜である。」
(池内紀著、岩波文庫) ―そして実に私も冒頭に述べたとおり、まさにこの池内が解説する道順を文字通り辿つた。

カフカよりラーベへと遡る道がいかに自然なものであるかという事実は、ドイツ文学を徹底する一つの特徴を自ずと浮かび上がらせてくずには置かないが、それは後日、稿を改めてということになる。

Zusammenfassung

“Deutscher Mondschein” ist die Erzählung von W. Raabe. Er verfasste die kleine Skizze in der Zeit zwischen dem 24. März und 8. April 1872, um seinen Plan auszuführen, weil damals er absichtigte, vier schon erschienene Erzählungen in einem Novellenband zu vereinen. Trotz des kurzen Werkes bezeichnet es gut den sozialkritischen Schriftsteller Raabe.

Seit dem 1968 Jahr haben wir ein anders Raabe-Bild als davor. Das neue Raabes Bild heißt ein unsentimentaler Rationalist, ein zweifelnder Spötter, ein mutiger Streiter, ein humanitärer Politiker, ein wahrhaftiger Poet, ein scharfer Kritiker, worauf Hermann Helmers fest hingewiesen hat (In: Wilhelm Raabe, Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart)

1968). Das vorliegende Werk, "Deutscher Mondschein", zeigt nicht nur diese Züge stark, sondern auch der vielmehr aufgefallende Zug der Selbstentfremdung. Nach der von Bismarck initiierten Reichsgründung 1871 wurde Raabe noch schärfer als Gesellschaftskritiker. Unter der zunehmenden militärischen Herrschaft und der Bekämpfung gegen die Liberalen neigt sich seine satirische, kritische Tendenz dem Existentialismus.

"Deutscher Mondschein" zeigt dazu die existentielle Probleme in der Gesellschaft so ähnlich wie Kafkas Werke.

Durch diese Übersetzung könnten japanische Leser das Verhältnis zu Kafka auffassen.